

2026年度 北海道大学大学院文学院人文学専攻 修士論文  
アイヌ文化を基盤とする観光まちづくりにおける地域博物館の役割  
—平取町立二風谷アイヌ文化博物館の事例から—

要旨

本研究では、アイヌ文化を基盤とする地域での観光まちづくりに対して地域博物館が果たす役割を明らかにすることを目的として、北海道沙流郡平取町・二風谷地域におけるアイヌ文化を基盤とした観光まちづくり、およびそれに対して平取町立二風谷アイヌ文化博物館（以下「町立博物館」とする）が果たしてきた・果たしうる役割について、調査・検討を行った。

序章においては、博物館の脱植民地化をめぐる実践や議論、および博物館の観光拠点化に関する政策の動向と議論を整理したうえで、先住民文化を主題とする地域の文化観光や文化継承に対する博物館の役割について明らかにすることの必要性を指摘した。そのうえで、本研究の目的と意義を示し、研究の方法と本稿の構成、使用する用語・概念について整理した。

第1章ではまず、先住民文化・アイヌ文化と博物館、および地域社会と博物館の関係性について、観光の視点も踏まえて先行研究を整理した。第1節では、脱植民地化の手法として先住民文化との協働と展示表象の見直しとが実践・議論の対象となってきた一方で、先住民観光の文脈においては、アイヌ文化自身による文化観光と文化継承の拠点として博物館が用いられてきた事例があることを示した。第2節では、地域博物館論の系譜を整理し、観光やまちづくりの文脈においても、地域社会や地域住民を中心に据えた地域連携が重要視されてきていることを示した。加えて第3節では、博物館における評価の実践と研究について整理し、博物館職員が参加する形でのロジックモデルの作成と、それに基づいた評価の実践が行われるようになってきていることを示した。

第2章では、二風谷における文化継承・文化観光、および町立博物館の概要と事業について、歴史的な経緯と現状を整理した。第1節では、1950～60年代の観光ブームの中で二風谷が観光地化した過程、およびその中で文化継承の取り組みが進展していった経緯を示した。第2節では、1960年代以降の平取町における文化継承と文化観光に関連する施策や事業について、2つのダムの建設をめぐる動きも含めて整理し、現在の観光まちづくりが多様な主体によって担われていることを示した。第3節では、町立博物館の事業の概要とその評価について文献資料をもとに整理し、観光客と地域住民の双方に対しての町立博物館の役割が論じられてきたことを示した。

第3章では、町立博物館の学芸員と協働で作成したロジックモデルと、筆者が実施した各調査の結果について述べた。第1節では、町立博物館の事業や活動のあり方に関するロジックモデルに関して、その作成経緯と内容について説明した。第2節では、ロジックモデルの検証のために行った聞き取り調査およびアンケート調査の結果を示した。特に、地域住民に対する聞き取り調査の結果と、それに基づいた博物館職員に対する聞き取り調査の結果を比較する形で示した。

第4章では、それまでの内容をもとに、町立博物館が二風谷における観光まちづくりに果たす役割について明らかにした。第1節では、二風谷における文化継承・文化観光の取り組みを「観光まちづくり」として捉えたとき、町立博物館は「観光の関係性モデル」における「中間システム」の一部として位置づけられることを示した。第2節では、町立博物館が二風谷における観光まちづくりに果たす役割を、「中間システム」としての4つの働きに分けて明らかにした。その結果、文化継承と文化観光の実践の媒介、およびその文化的・社会的基盤の整備という役割が明らかになった。第3節では、その役割を果たす前提として、他主体との「弱い」ネットワークに基づく柔軟な連携や、他主体との対話を通じた役割の問い直しが必要とされていることを示した。

終章では、以上の議論をまとめたうえで、本研究の限界と今後の課題を示した。